ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「リオル、飛べ！」

　後方から攻撃を仕掛けてくる敵にタイミングを合わせ、リオルは跳躍して、相手の蹴りを躱す。

　だがその刹那、もう片方の足がリオルの背中に強烈な一撃を浴びせる。クルクル回転しながら、リオルは吹っ飛び地面に落ちた。反撃しようと、すぐさま立ち上がって後ろを振り返るリオルだが、その目に相手の姿は写っていない。慌てて周りを見渡すリオルだが――

「リオル、上だ！」

　攻撃は、リオルが思ってもみなかったところから飛んできた。主人の指示で、リオルは慌てて適当な方向に頭から飛び込み、伏せる。先程までリオルのいた場所の地面が、蹴りによる攻撃で軽くえぐれた。

　土や小石が舞う中、リオルはすぐさまその場から飛びのき、相手との距離をとる。

　リオルが今戦っている相手は、人型の鶏みたいな、上半身が黄色で下半身がオレンジ色のポケモンだ。頭には三本の鶏冠があり、手には鋭い爪、そして何より、細いのに強靭な足。わかどりポケモン、ワカシャモである。背丈は、リオルの方が頭一つ分位低い。神楽の、最後のポケモンだった。

　ほんの数回肉弾戦を繰り広げたリオルの感想としては、やはり相変わらずスピードが速いことが第一に挙げられるだろう。とは言っても、さっきまで戦っていたニューラ程では無い。代わりに、攻撃力の高さは、ニューラの比では無かった。さっき地面が抉れたのを見れば分かる通り、あの足から繰り出される『にどげり』という技は強烈である。恐らく、一発でもモロに貰えば気絶は免れないであろうと、リオルは悟る。

「ワカシャモ、火の粉！」

　加えて、遠距離攻撃も出来るので、攻撃範囲に隙が無いのだ。近距離攻撃しか出来ないリオルとしては、離れれば一方的に攻撃され、近づけば蹴りの洗礼が待っているので、中々に対処しづらいのである。

　真っ直ぐに飛んでくる幾つもの小さな火の玉を左右に躱すリオル。だがその隙に、ワカシャモは地面を蹴って、リオルとの距離を一気に縮めた。慌てて後方に退こうとするリオルだが、時既に遅し。

「二度蹴り！」

　神楽の声がリオルに聞こえたと思ったら、ワカシャモの右足が消える。刹那、二度の衝撃が襲い、リオルの視界は真っ黒な空を写していた。

　咄嗟に腕を体の前でクロスさせていなければ、リオルは今の一撃……いや、二撃で終わっていただろう。自分の反射神経に、リオルは今日ほど感謝した日は無い。

「火の粉！」

　仰向けに倒れたリオルに指を差して、神楽は叫ぶ。ワカシャモの口から、野球ボール程の大きさの火の玉がリオル目掛けて放たれた。リオルはそれを、地面を転がって躱す。再び空を見上げる格好になった時、リオルの目に、上空から飛びかかって蹴りを入れに来たワカシャモの姿が映った。

　だが、リオルも一方的に攻撃されっぱなしのままでは無い。数回の攻防で、ワカシャモの蹴りのタイミングは掴んでいた。ワカシャモの左足が消えた瞬間、リオルは右腕を振る。バァンという音と共に、ワカシャモの足が弾かれた。ワカシャモの体が、大きく左に傾く。

「しまっ……」

　そしてその隙を、雅也もリオルも見逃さない。跳ねるように起き上がったリオルは、ぐらついていたワカシャモのガラ空きの胴体に手のひらを当てる。

「はっけい！」

　指示と共に手をスライドさせると、再びバァンという音が鳴って、ワカシャモが大きく吹っ飛んだ。まるでさっきのリオルのような吹っ飛び方だったが、こちらはちゃんと空中で一回転して地面に着地する。そして、両腕を広げ、右足を上げて戦闘態勢をとった。

　だが、まるで平気そうな動きをしたワカシャモも、流石にノーダメージを装うことには失敗した。体がグラッと揺れ、膝をつき、先程『はっけい』を受けた所に手を当てて顔を歪める。

「ワカシャモっ？」

「リオル、今だ！　畳み掛けるよ！」

　こんなチャンス逃すまいと、雅也は叫ぶ。リオルも、雅也の指示を待たずに走り出していた。

「ワカシャモ、いけるかっ？　火の粉！」

　神楽の声に口を開くワカシャモだったが、出てきたのは、攻撃するには余りにも小さい火の玉だった。それが十発ほどリオルに向かっていったが、突っ込んでくるリオルは、必要最小限の火の玉だけ腕で払い、残りは気にせず、走るスピードを緩めない。

　そしてついに、リオルは自身の攻撃の間合いに入った。まずは、さっき『はっけい』を撃ち込んだ所に右ストレートを入れる。

「よしっ、そのまま――」

「いや、ワカシャモ、離すな！」

　続けて回し蹴りをきめようとしたリオルだが、懐に入れた自分の手を抜く前に、その腕をワカシャモががっちりとホールドする。慌てて抜こうと、引く手に力を込めたリオルだが、ワカシャモのどこにそんな力が残されているのか、びくともしない。

「リオル、抜こうとするな！　そのままはっけい！」

「ワカシャモ、蹴り上げろ！」

　雅也と神楽の声が重なる。先に動いたのはワカシャモの方だ。手を動かそうとしたリオルは、大きく仰向けに吹っ飛んでいる自分に気が付く。お腹の辺りがジンジンしていた。恐らくここに蹴りを入れられたのだろうと、リオルは思う。

　幸いだったのは、さっきの『はっけい』がクリーンヒットした時のダメージのせいか、ワカシャモの蹴りの威力が弱まっていたことである。モロにくらったリオルだが、まだ充分戦えるレベルだった。

　地面に着地次第、再び懐に突っ込んでやろうと考えたリオル。しかし、一向に着地しない事に気が付く。

　何故だろうと首を傾げたリオルだったが、ふと、自分の体に糸のような、ネバネバしたものがくっついているのを見た。

「あ……あれはっ？」

「ふぅ……ようやく、かな？」

　頭に巻いた緑色の鉢巻から染み出る汗を手の甲で拭い、少しだけ安堵したような顔で神楽は呟く。それを聞いた瞬間、雅也は今、リオルの体にくっついているものが何なのか知った。

　これのせいで空中に留まっているらしいと気が付いたリオルは、この糸を何とかしようともがく。だが、もがけばもがくほど、糸はリオルの体にさらに巻きついてきた。リオルはこの時、この糸の正体に、まだ気が付いていなかったのだ。

「リオル動くのを止めろ！　その糸は……」

　そう叫ぶ雅也の声も、焦るリオルの耳には届かない。そしてついに――

　雁字搦めになって、リオルは完全に動くことが出来なくなってしまった。